

定本聊齋志異卷二

定本聊齋志異



異志齋聊本定 卷六全
二卷



昭和三十年六月二十五日 初版印刷
昭和三十年六月三十日 初版發行

定價九百五十拾圓

譯者 柴田天馬

發行者 秋山修道

印刷者 中内佐光

發行所 株式會社 修道社

東京都中央區日本橋小舟町二丁目四番地
電話茅場町(66)一七三四、四〇八三番
振替口座(東京)六一六九一番

落丁、亂丁のものはお取替へいたします。

晴印刷・鈴木製本

目次

狐	鴻	山	珊	新	局	局	局	收	恆	義	義	成
					詐	詐		中		犬		
夢		魑	瑚	郎	三	二	詐	怪	娘	二	犬	仙
.....												
三	五	五	四	四	三	三	二	二	一	一	一	三

太醫	細侯	公孫夏	姊妹易嫁	宮夢弼	張不量	柳秀才	山神	雲蘿公主	盜戶	五通	五通二	道士	秦生	老嫠	戲綰
..... 一九一	 一九四	 二〇一	 二〇七	 二一四	 二二五	 二三七	 三九九	 二三〇	 二四七	 二四八	 二五三	 二六一	 二六五	 二六八	 二七三

陳	錫	九		三六一
江	城		三九三	
愛	奴		四一〇	
考	城	隍		四二〇
嬌	娜		四四四	
公孫	九娘		四七七	

扉・挿畫 福田 貂太郎

定
本
聊^{れう}
齋^{さい}
志^し
異^い
卷
二

成仙

文登の周生は少い時から成生と共に筆硯で杵臼交であつたが、成は貧乏だつたので、終歲常、周の依になり、周のはうが以齒爲長だつたから、周の妻を嫂さんと呼つてゐた。そして節序には登堂きて一家の如くに親んで居たが、周の妻が子供を生み産後暴かに卒でしまつたので、其の繼に王氏を聘したのであるが、成生は少し故があつて未王氏には嘗請見つた。

一日、王氏の弟が姉を省に來て、内寢で宴をして居るところへ適くり成がやつて來た。家人が斯を通白ぐと、周は邀へるやうに命けたが、成は、失禮だからといつて、入らずに辭去しまつた。周は席を外舎に移し、成を追かけ而、一緒に還つてきた。そして甫と坐る即、人が來て、

「別業の僕が邑宰に捕まつて、重く答たれて居ります」

と白げた。先是、黄といふ吏部の役人の家の牧傭が、牛を牽いて周の田を牛蹊し、周の僕と相詬をした。そして奔ていつて主人に告げ、僕を捉へて官に送つた途、僕は被答責たのである。周は詰得其故て太く怒り、

「黄の牧猪奴！ 何敢爾な！ 其の先世は僕の大父の服役だつたんだ。促得志たとおもつて人も無げ

なことをする」

といふと氣填吭臆あきふく忿ふて起たち上あがり、黄わうの家けに尋ゆかうとするのを、成せいは捺おし止とめて、

「まあ待ちたまへ、強梁じやうりやうの世界せかいに早い白しろいはないのだ。況まじて今日けふの官宰くわんざいは半なかば強寇じやうこで、刀かたなや弧ゆみをひねくり廻まわはさない者ものはないのだ」

といったが、周しうは不ふ聴きかつた。成せいが再さい三諫さんげんめて、泣なみだをさへ下くだした乃の、周しうもおもひ止とどまつたが、怒いかりは終つひに釋とけず、轉側てんがわをしなから且またに達たると、家人けにんに謂いつた、

「黄くわうは我われを欺ほかにしてゐるのだ。我われの仇かたきである。併ひし姑置しよせ之これして、呂令ちよは朝廷てうていの官くわんで勢力家はかりよくみの官くわんではない。縦もし争あらそひがあれば其その兩造りやうそうを調しらふべき筈はずなのに、嗾けしけられた狗いぬのやうに片方かたがたばかりを責せめるのは何なんだ！ 我われもあいつの傭けうを呈治ていぢへ、呂宰ちよざいが何なんういふ處分ところをするか見てやる」

と、大たいしたけんまくのところへ、家人けにんが皆從みなすい憑ようたので計遂決けいすいけつめ、訴狀そじやうを具もつて呂宰ちよざいの所ところへ出でかけて赴いつた。すると、宰ざいは訴狀そじやうを裂さいて、擲なりだした。周しうは大たいそう怒おどつて宰ざいを語優ごいうつた。宰ざいは慙はなちもし悲かなりもして周しうを逮繫しほつた。

成せいは辰ととを後あとて周しうを尋たづね、始めて周しうが城内じやうないへ訟理うたへにいつたことを知しり、勸止かめどめに急奔かきつたけれど其その時にはもう圍圍ひとやの中に在あたので、頓足あしよりしたが、よい無所爲計くふはなつた。ちやうどその時とき、三人さんじんの海寇かいこを獲とつたので宰ざいは黄くわうと相談さうだんし、賂かねをやつて彼等かれらに囑いづつけ、周しうの同黨なかつであると捏つくり言ことを云いはせ、その詞ことばを據しよにして申告しんこし、周しうの頂衣みんぎを剝はぎ取とつて慘酷さんこくに榜掠ぼうりやくした。成せいは獄いふに入はいつて周しうに遭あひ、相顧あひみみて悽酸かなしんだのであるが、叩闥ちきその謀さうをすると、周しうはいつた、

「自分の身は重狂に繋がれて籠に在る鳥のやうなものだし、弱な弟は有ても、たゞ凶飯をするぐらゐなことしかできないんだ」

成は鋭身んで、自任けた。

「是は予の責任だ。困難を救ふに急でなければ、鳥も友人は用らんよ」

といつて周に別れると、叩聞に行けた。周の弟が臆をしようと思つて來た則、もう去かけてから時を経てゐたのであつた。

成は都に至たが控へる無門入くて困つて居ると、天子が獵にお出になるといふ相傳をきいたので、預かじめ木市の材木の蔭に隠れて居た。俄、お駕が過つたので、成は地に伏舞て哀み號んだ。訴狀は遂に得准になり、成は驛送りになつた。そして事件は司法部院の審問に附せられ上奏された。しかし其の間に十月餘り闊つたので、周は已に誣に服して辟を定められるところであつた。部院は御批に接して大く駭ろき、復び周を提だして讞を調べることになつた。黄も亦駭いて、周を殺さうと謀り、監者に賄賂をやつて飲食を絶つて了つた。周の弟が餓れものなどを持つて問に來ても、苦く禁じて拒ので、成は又部院に赴つて、不法を聲し、始と提問を蒙けることになつたときには、周は業已飢餓のために起てなくなつてゐた。院臺は怒つて監者を杖斃させた。黄は大そう怖れて數千金を納め、營脱くふうを囑んだ。以是朦朧題免でしまつた。宰は法を枉げた罪で流刑になり、周は放免されて家に歸つた。それから周は益々成と肝膽相照す仲になつたのである。

成はこの訟繫以來世間に對する情が盡り灰り、周を招んで一緒に世の中から隠れようとしたが、周は

少い婦に溺れて、そんなことは迂といつて一笑に付して了つた。成は言はなかつた而ども、其の意は甚と決まつて居たのである。

別れてから幾日か成が至ないので、周の使が成の家について探すと、成の家人は、周の所に居るのだらうと思つて居たといふのであつた。兩方に見えないので、始めて疑ひを生じた周は、心に異つたことのあるのを知つて人をやり、天下の寺觀壑谷殆んど至らぬ隈もなく成の蹤跡を物色させ、又時々成の子に金帛を送つて生活を卹けてゐた。

又て八九年たつと成が忽然とたづねて來た。見れば黃巾鼈服、岸然な道士の貌である。周は大く喜び、臂を把つて、

「君は何處へ往つたんだ。徧り僕に搜尋さしたね」

といふと成は笑つて、

「いや孤雲の如く野鶴の如く、定つた棲所もない。併し別れて後幸ひに頑健だよ」

周は酒の支度を命けて間澗のことを略と道し、道士の服裝を變へさせようとしたが、成は笑つて應じなかつた。そこで周が、

「愚だ哉、君は何故敝屣のやうに妻子眷族を捨てたんだ」

といふと、成は笑ひながら、

「いや不然、人は僕を捨てようと思つても、僕は誰を棄てることが能よう」

といつた。棲んでゐる所を問と勞山の上清宮に居ると答へた。さうかうする中に夜になつたので並

んで寝たが、夢に、成が裸になつて胸の上に伏しかゝり、氣不能息いので、訝しんで何爲るのだと問ても殊に返辭をしなかつた。忽、驚いて眼が寤た。成を呼んでも應がないし、坐つて索つて見ても、杳然として何處へ往つたか分らないのだ。移時してから始めて自分が成の榻で寢て居るのに氣がつき、駭いて云つた、

「昨夜はそんなに酔つても居なかつたのに、何うして此に顛倒たんだらう」

乃、家人を呼ぶと、家人が火を點したが、豈圖らんやそこにあるのは、成儼然の姿であつた。一體周は髭の多い質なのだが、手で撫でて見ると疏らなやつが幾莖もないのである。鏡を取つて自分で顔を寫した周は、

「此にゐるのは成生だ。はて、自分は何處へいつたんだらう」

と訝つたが、即て、

「これは成が術をつかつて自分を世の中から隠遁させようとしたんだ」

と寤いた。そして内へ行かうと思つて入りかけたが、顔が違つて居るので弟が通さなかつた。周は自分で自分を證明することが出来ない即、僕と馬とを命け、成を捜しに家を出た。

數日を経て、勞山に入ると、馬が急にどん／＼駛け出して、僕には不能及かつたが、そのうちに一本の樹の下でやつと止つた。見まはすと羽客の往來する者が甚う衆く、其の中の一道人が自分を見たので、成といふ道士は何處に居るのでせうと尋ねると、道士は笑ひながら、

「名前は何き及んで居る。何でも上清宮に居るやうだ」

と言ふと逕にあるきだしたが、周が見送つてゐると、一矢之外で、向うから来る一人と何やら話をし
て去つて了つた。そのうちに言してゐた人がそばに至たのを見る乃、意外にも其れは同じ文社の生で、
周を見て愕いていつた、

「數年晤はなかつたね。人の話では君は名山に入つて道を學んで居るといふことだつたが、今尙人間
の仲間に遊戲して居るのかね」

で、周が今迄の異なことを悉く述すと、友はさらに驚いた。

「や、僕は今適遇之つたんだ、さうして君だと思つたんだ。去つてから間がないから未だ遠くは行か
んだらう」

周は大そう異に思ひ、

「自分の顔が分らんはずはないのに、怪しい哉！」

と云つて居るうちに僕が尋ねて至たので、急におひ馳けたが無蹤兆かつた。

一望は寥漠ところで、進退難自主かつた。かれは歸るべき家の無いのを念へ遂、成に窮追かうと決意
めたが、其のうちに山はだん／＼怪險くなり、馬に騎ることが出来なくなつた遂、馬を僕に付して先に
歸らせ、自分は遙運つた山道を歩いて往つた。すると遙に一人の僮が唯獨り坐つて居るのが見えた。遙
近つて程を聞き、告以故すと、僮は、

「私は成先生の弟子でございます」

といつて、周に代つて衣糧を荷ひ、導をして俱に行くのであつたが、星飯き露宿つて、遠行殊遠

と歩るきつゞけ、三日目に始と至たのは、世で所謂上清宮ではなかつた。それに時は十月であつたが、山の花が路に満さいてゐて、冬の初めのやうではなかつた。

僅が内に入つて、

「お客様がお出になりました」

と報せると成は遽いで出て來た。始と己の形を認ることができたのである。成は周の手を執つて中に入り、酒を出して謙語してゐると、異つた彩の、笙簧のやうな聲の禽が、人に馴れて驚かず、時々座上に飛んで來て鳴いて居た。甚く異だとは心ひながら、塵俗の念が切く、流連もるやうといふやうな考へはおこらなかつた。

地下に蒲團が二つあつたのを曳き寄せて竝んで坐つて居たが、二更後になつて萬慮俱寂と、忽ち瞥然一眴んで、何だか自分と成と位地が變つたやうなきもちがした。疑之つて領下を捋でると、また故の如な千思になつてゐた。既曙つて浩然返りたいと思つたが、成が固く留めるので止むを得ず三日を越した。すると成が、

「少し寝たまへ、明日早く君を送らう」

といふので、甫めて交睫つた。

「行装が已具つたよ」

といふ成の聲に目を覺まし、成に従いて行くのであつたが、殊り舊の道とは違つて居た。無幾時、里が在望中た。成は路の側に坐つて、周にひとりで歸れといつた。周は成を連れて行かうとしたが、強